教職大学院における教育評価の力量形成
—見取りと励ましの力をつける—

佐古　清
大学院連合教職実践研究科

1. 教育評価の多面性と重要性

教員養成において、教育評価の力量形成がもっと重視されるべきではないかというのが、学校現場を経験してきた実務家教員としての率直な思いである。教育評価は、学習評価をはじめ教育活動全般について教育目標に照らして行うものである。学習や成長の状況を把握し、そのフィードバックを通して子どもを励まし学習や成長を促すことや、教育実践の改善を図ることが本来の目的である。教育評価には、教科指導における学習評価、児童生徒理解などの生徒指導やキャリア教育に関係するもの、学校評価やカリキュラム評価等の学校経営に関わるものなどがあり、それらは相互に関連して実装されている。教師は日々さまざまな場面で評価を行っている。こうした評価は、意図的・計画的なものだけでなく、即時対応的・無意識的に行っているものもあり、毎日の教育実践に内在している。したがって教育評価の力量形成は、教師の指導力や教育効果に直結すると言っても過言ではないだろう。

院生は、大学院で教育評価の基になる見方・考え方を学びながら、自らの見方・考え方を問い直し、教育観を形成・再形成していく。同時に、実習を通して学校現場で実際に子どもたちや教職員と関わるなかで揺らぎを経験し、省察を重ねながら子ども観や教育観を深めていくことになる。

2.「見取り」の力を磨く

子どもの学びや成長を促すために必要になるのが、教師の「見取り」である。授業では、子どもたち一人一人の学習状況を見取りながら学びを促したり、指導の改善に繋げたりしている。形成的評価もその一つであり、そこでの「見取り」が子どもの学びを導くことになる。では、院生が「見取り」のスキルを高めるためにすべきことは何か。まず、授業中等に指導者が子どもの何を見ているのかを観察することだろう。実習での授業参観やティームティーチングを通して、教師の見取りの視点やスキルを意識的に学ぶ必要がある。生徒指導においても、教師は一人一人の子どもの背景や自己理解について把握し、児童生徒理解を深めながら指導や支援を行っている。今注目されている非認知能力についても、育成を図るためにはその「見取り」が重要になる。また、子どもを個々に見取るだけでなく、仲間関係や学級集団の状況についても観察･分析を行い、それを基に学級集団づくりを行っている。そこでは「集団を読む力」と言われるような集団を見取る力も必要とされる。ただし、対象が個人であっても集団であっても、一人で見取るのは限界があることも事実である。したがって、複数の教師や教師集

団としての「見取り」ができるような連携の仕組みや校内体制をつくることが極めて重要になる。さらにそうした中で、院生や若手教員の「見取り」の力も磨かれるというのが理想であろう。京都府教育委員会では、教員に必要な力の１番目に「気づく力」を挙げている。「児童生徒一人一人を深く理解し、寄り添った指導ができるよう、小さな変化にも気づくことができる力」である。京都市教育委員会でも、「特性や背景を理解し、子ども一人一人を大切にすること」を強調しており、いずれも「見取り」に通じる力が重視されている。

3. 小・中・高の校種による違い

子どもの「見取り」は、小学校では馴染みのある言葉である。ところが、中学校ではその使用頻度が減り、高校段階ではほとんど聞かれない。「見取り」は、子どもの発達段階と関係しており、適切な支援が必要な児童期で用いられることが多く、自律が進む青年期に入ると使われなくなるというのは容易に理解できることである。子どもの学習理解の程度を把握し、学びを促したり指導方法を改善したりすることがとりわけ必要な小学校段階では、早期につまずきを発見し、手立てを講じるための「見取り」は非常に重要である。一方、中学から高校になると教科の専門性が重視されるようになり、客観的なテストによる評価のウエイトが増すことになる。このように校種によって必要とされる教育評価の力が変わるところはあるが、翻って、校種が異なる院生が学び合う教職大学院だからこそ、校種を越えた議論が新たな気づきを生み、豊かな「見取り」や教育評価の力量形成につながると考えられる。

4. 教育評価を教育活動の充実につなげる

教育評価を学年運営や学校づくりに生かすことも重要である。学校現場では全国学力学習状況調査をはじめ各種の調査が実施されているが、それらが十分に活かされているかは点検の余地があるだろう。学校では教育評価から得られるデータをエビデンスとして教育活動の改善につなげることが求められる。例えば、客観的なデータと教職員の実感とを擦り合わせながら課題を見つけ、改善策を考える研修も有効であろう。自校の課題を共有することで取組の方向が明らかになり、教職員のベクトルが揃うことにも繋がるはずである。また、子どもたちの様子や情報については教職員で速やかに共有することが望ましい。そのためには、学校組織の中に情報が血液のようにながれる仕組みや関係が必要になる。問題事象の情報共有は言うまでもなく、取組の成果や子どもの成長などもしっかりと共有することで、教職員がエンパワーされ同僚性が高まると考えられる。学校現場で「研修教員」として実習を行う院生は、学校の組織体制や教職員集団の文化についてもアンテナを張り、多くのことを学んでいることだろう。

毎週水曜日の実習を年間通して実施することで、その間の子どもや学級集団の成長を見届けることができるようになった。院生が行うその時々の「見取り」についても、実習翌日の授業で行っている省察を通じて、子どもの成長を追うように深化しているにちがいない。教職員集団の変化や成長を感じ取りながら、その一員として実習校の教育活動に関わることで、実践的な教育評価の力量が形成されることを期待している。